
【夜さろん】 第 15 夜

「現代アートを短編小説で楽しむ読書会」

日 時:2015 年 8 月 28 日(金)19:30~22:00 ※お盆休みの関係で第 4 週開催に変更しました

場 所:カフェ・ミヤマ渋谷公園通り店2号室

参加者:8名

バリスタ(進行):芹澤

本 :『いちばんここに似合う人』 ミランダ・ジュライ (新潮クレスト・ブックス、2010)

内 容:

小説が”アート”になる時——。ふだんの読書とは違う、どんな感触が生まれるでしょうか。美術家にして映画監督またある時は歌手というマルチ・アーティストが描いた 16 の短編小説を、ギャラリーに飾られた 16 点の美術作品に見立て現代アートの文脈で、みなさんと鑑賞したいと思います。

小説の批評用語ではなく、アートのボキャブラリを駆使してみましょう。簡単なスケッチや陳列・構成なんかも考えてみましょう。

■開催概要■

《夜さろん》原則、2 月、5 月、8 月、11 月の第 3 金曜日

アートのディスコース ～アートを自分の言葉で考えてみる～;

◆《今時のキュレーターの仕事》

展覧会の企画制作をするキュレーターですが、その職能はどのようなものなのでしょうか？ 美術史、アーティスト、場の特性、同時代の社会的動向や議論などを結びながら作られる展覧会には、まだ見ぬ可能性が眠っているといってもいいでしょう。キュレーターという職業の持つ媒介者的な役割についてもいっしょに考えてみましょう。

◆《アートから金銭的価値を引くと、何が残る？》

オークションでは、落札最高額の更新がつづいていますが、アートは市場価値だけで判断されるものなのでしょうか。実は、必ずしもそうではなく、マーケットの他にもアートの価値を測るモノサシは存在します。そのモノサシで、アートの他なる価値について思いを巡らせます。

ミランダ・ジュライ(Miranda July)

1974年ヴァーモント州生まれ。カリフォルニア大学サンタクルーズ校を中退後、ポートランドでパフォーマンス・アーティストとしての活動を開始し、短篇映画も撮り始める。2005年、脚本・監督・主演を務めた初の長篇映画『君とボクの虹色の世界』がカンヌ国際映画祭でカメラ・ドール(新人監督賞)を受賞、大きな注目を浴びる。2007年、初めての短篇集『いちばんここに似合う人』でランク・オコナー国際短篇賞を受賞。2011年、2作目の長篇映画『ザ・フューチャー』および『あなたを選んでくれるもの』を発表。2015年には初めての長篇小説 The First Bad Man を刊行した。2012年に長男を出産、夫で映像作家のマイク・ミルズとともにロサンゼルスに暮らす。

収録作品；

共同パティオ	
水泳チーム	
マジエスティ	
階段の男	
妹	
その人	
ロマンスだった	
何も必要としない何か	
わたしはドアにキスをする	
ラム・キエンの男の子	
2003年のメイク・ラブ	
十の本当のこと	
動き	
モン・プレジール	
あざ	
子供にお話を聞かせる方法	

Question；

- ◆Q1；作品を読んだ印象をスケッチ/イラストで表現してみてください。
- ◆Q2；とくに印象に残った作品(短編)はどれですか？
- ◆Q3；本作品の特徴を言い表す Key-word を3つ挙げてみてください。

「社会の芸術フォーラム」設立趣意

<http://skngj.blogspot.jp/p/skngj.html?m=1>

現在、さまざまな場所でアートと社会との関係性をめぐる議論が提示されています。

地域系アートは地域社会のあり方を、アートを通して、アートにおいて問い返していく試みであり、また、「社会」との接触においてアート自身が変容を迫られる、そうした再帰的な実践であるといえます。というか、そうであるはず、そうでなければならぬはずです。アートによって社会の日常に異和をもたらし、日常そのもののあり方を問い返していくとともに、アートそれ自体が社会との関係を「アートであるがゆえに可能である」という自律性を踏まえながら捉え返していく契機。そうしたものが、地域系アート、あるいは特定の地域を舞台としたリレーショナル・アートの眼目であると考えます。いうまでもなく、様々な地域でその実践は「成功」を収め、今では把握しきれないほど数多くの取り組みが、日本全国の至るところで行われるようになってきました。今後東京五輪の開催に向けて、こうした動向はますます加速していくことでしょう。

しかし、そうした「成功」は果たして、社会とアートとの相互反映的な関わり方の成功であると言い切れるでしょうか。個々の作品ではそうした意味での成功を収めたものも少なからずあることは間違いありません。ですが、いわゆる「街おこし」や「経済効果」というアートでなくとも可能な「機能」に還元されてしまっている事例もまた少なくないと思われます。そうした「機能」であれば、アートでなくとも達成しうる機能的等価物が存在しています。また他の機能的等価物（公共工事など）のほうが、当該の機能を果たすには効率的であるとすらいえるかもしれません。また多く

の若手アーティストが発表の機会を求めて、そうした地域系アートへ積極的に参加するようになっていきます。しかしそこにおいて、社会とのアートの相互反映的な関わりがどれだけの深度をもって捉えられているかは不分明と言わざるをえません。

難しい問題です。

アートだからこそ発揮できる機能、機能的な等価物と入れ替え不可能なアートのあり方を考えていくためには、アートの自律性とともに、社会におけるアートという実践の機能を精査していく必要があります。自律性と他律性という単純な問題ではありません。「地域系」を謳う以上、必然に関係をもたざるをえない「社会」なるものを、アートがどのように捉え、かかわりをもっていか、その方法論が切実に問われているのではないのでしょうか。とりわけ現代アートは、その文脈を知らない「一般のひと」にはきわめて付き合いにくい存在です。それに対して、自律性への信憑をもとに、ひとびとのアートへの無理解を嘆いて見せることも可能でしょう。

しかし、たださえそうした文脈限定性のなかにある現代アートが、「社会」とかかわりを持つとすれば、そうした開き直りは禁じ手としなくてはならないはず。アートの側が、「社会」を単層的に見てしまっている可能性を考えざるをえないのですから。「社会」なるものを、単に「芸術の外部」「作品や制作の実質とは無関連な下部構造」と捉えたとすれば、それは、「ひとびとがアートを単純視」しているのと同じく、「アートが「社会」を単純視している」ということになるのではないのでしょうか。

さまざまなアートが都市空間に繁茂するなか、わたしたちは「アートの単純視」「社会」の単純視」という二重の単純視をあらためて考え直した

いと考えます。本来この二重の単純視の不幸な関係性を変容させ、アートと社会の相互反映性を媒介していく契機が、地域系アートというものの出発点であったはずです。この原点に立ち戻り、相互反映性を実現するための方法論を模索すること、そしてその方法が他の機能的等価物によって入れ替え不可能なものであるかを評価すること。そうしたことが、地域系のみならず、都市や空間との接触平面を持つ現代アートの次のステップとして求められているのではないのでしょうか。個々のアーティストが自らを規定し、そして期待されている場所の、社会の変容を生起させることは、結局のところ個人がどのように世界を眼差し、どのように行動するのか、というところに帰っていくことにならうかと思えます。その契機はこの「アートと社会の相互反映性」にこそ求められるはずです。

相馬千秋氏を中心として本年設立された芸術公社のサイトには、「1.「あたらしい公共」を提案し、体現する」「2. 時代と社会に応答するあらたな芸術の方法論を提唱し、実践する」「3. 異なる専門性を持つディレクターによるコレクティブ」「4. アジアにおけるプラットフォームを目指して」といった四つの目標が記されています。芸術公社がアートディレクションサイドからアートの公共性を実践的かつ理論的に取り組んでいられるのだとすれば、私たちはむしろ、アートワールドを人文的・社会的な側面から検討し、アートワールドという社会、あるいはアートワールド「と」社会の関係を、問い返していきたいと思っています。アーティストとキュレーター、批評家、研究者の相互的な討論のプラットフォームを形成し、アートの実践、批評の言語の新しい形を模索する。そうすることによって、上記の「アートと社会の相互反映性」を領域横断的に考察していくことが、私たちの目的です。

社会学者のニクラス・ルーマンは、「社会システム Soziale Systeme」を、①相互行為、②組織、③全体社会(機能システム)という三つに分類しています。芸術にそくしていえば、①ではアーティストの制作実践や展示行為、観客の鑑賞など、いわゆる「コミュニケーション」としての社会が問われるでしょうし、②はいわゆる「アートワールド」、つまりアートをめぐる制度的背景、経済関係、組織構成、ヒエラルヒー、有名性の機能などの社会的なあり方が問われるでしょう。そして、③では、芸術システムという自律した機能システムが果たす機能、他のシステム(法システムや経済システム、教育システムなど)との関連性が問われることとなります。

「社会」といっても、一口に表現できるものではありません。様々な水準における「社会」のあり方を丁寧にたどり返し、社会の複雑性を十分に踏まえながら、次なるアートの実践へとフィードバックしていく、そうした回路を整えていく必要を感じます。社会はアートの外にあるものではなく、アートそれ自体も社会的実践であり、自律性の意味論もそうした実践の反復を可能にする社会的なコードである、と考え、ロマン主義的な自律性神話とも、悪しき社会学的なイデオロギー論とも異なる、アートと社会の関係を考察する言説と場が切実に求められている、とわたしたちは考えます。

そうした問題意識にもとづき、私たちは、アーティスト、キュレーター、批評家、芸術研究者、芸術教育研究者、社会学者、文化研究者、経済学者、政治学者、文化行政の関係者、ワークショップの実践者、編集者、ジャーナリスト等が集まり議論を重ねる場を設計し、「社会(と)アートの関係性」をめぐる言説と実践のバージョンアップを図るべく、「社会の芸術フォーラム」を立ち上げることとしました。個々の論点について

は、見解の対立はあるでしょうし、それはむしろ歓迎されるべきことと考えます。そのうえで、上記のようなアートと社会の複雑な相互反映性を

精査する、という問題意識を共有していただける方と、「異種格闘技」をしていきたいと思いません。

[読書]”IT CHOOSES YOU” / Miranda July (McSWEENEY’S)
<http://d.hatena.ne.jp/zoot32/20120528#20120528fn1>

人によってていどの差はあれど、われわれは「他人とつながる」ということを高い優先順位に置きながら暮らしているのだが、同時にコミュニケーションは、相手との距離感をそこはかたなく計りながらでなければ関係性を保てないという、わりとややこしい決まりごとで成り立っている。ゆえに、たとえどれほど他者とのつながりを切望していても、よほど注意しなければ、そこには剥き出しの自分や他人が息苦しいほどに近い距離で現れてしまい、するとわれわれはそのくありえないほど近い他者>の存在におじけづき、尻込みしてしまう。そしておもわず「この人はいったい誰なのか？そしてこの人にとっての私とはいったい誰なのか？」と問いかけずにはいられなくなるのだ。ほんらい、ほとんど誰もが他者とつながりたいと願っているはずなのに、なぜこのように奇妙な事態が起こってしまうのだろう。

ミランダ・ジュライの新刊 “It Chooses You” は、著者であるミランダが、PennySaver と呼ばれる情報誌(売ります買いますの情報が載ったもの)に広告を載せた人びとへ電話をかけてインタビューを依頼し、実際に会いに行き話を聞いたようすを、写真と会話の記録を含めてまとめた

一冊だ。ミランダとインタビューイの間にある関係性は、彼らが売ろうとしている洋服や中古の電化製品、スーツケース、おたまじゃくしといった商品のやり取りのみであり、他に共通点と呼べるものはあまりない。そうした、通常的生活範囲ではまず会うきっかけのないであろう人びとに会いに行くというこの試みにおいて、彼らの話に耳を傾け、両者が何らかの情緒的つながりを築くことはいくぶんむずかしそうにも見える。やはり、見ず知らずの誰かに会いに行くのは大きな冒険だ。そこにはわれわれが何より怖れる、あの「剥き出しの他者」が待っているかも知れないのである。だからこそ、こうしたミランダのテーマには、彼女の表現における中心的主題である「他人とつながること、その大切さについて」がよりダイレクトに現れるように思えるのだ。それは彼女の作品、たとえば『君とボクの虹色の世界』(’05)においても重要なテーマであった。

ミランダが会いに行く人びとには、それぞれに生きてきた人生の過程や、そこで培われてきたライフスタイルや価値観がふしぎなりアリティを伴って存在し、その独特の手ごたえに彼女は圧倒される。こうした驚きにあふれた描写がこのテキストの魅力だ。とあるインド人女性は、インドの貧しい地域へ寄付をつづけているし、別の男性は壁に見知らぬ人びとの写真を貼って、もしその人が自分の家族だったら、友人だったらどんな感じだろうと想像することをささやかな趣味にし

ている。ある者はもうすぐ大学進学を控えて希望に満ちあふれており、また別の者は犯罪歴があり自宅監禁の途中で、足に信号を発信する機械を取りつけられている。こうして雑誌の「売ります買います」コーナーを通じて出会った人びととの関係性のなかでミランダは、彼らに興味や好感を抱くのと同時に、あまり剥き出しすぎる他者に戸惑い、不安を感じたりもする。こうした描写もリアルでおもしろい。彼女はとあるインタビューの途中で、相手との距離感に戸惑いながらこう考えるのだ。「私はポケットの iPhone をぎゅっと握った*1。いま、いきなりメールをチェックし始めたらヘンだろうか？ それともニュースを読みだすとか。私は、ほんの少しでいいからいったんこの場所から離れたいと強くおもった。トイレを借りるのもひとつの手だ」。

最終的にミランダは、PennySaver を経由した出会いから、映画『ザ・フューチャー』(’11)における中心的なプロットのモチーフを得るが、このテキストも、『ザ・フューチャー』も、不器用な

がらに他人とのつながりを求めてきたミランダ・ジュライという表現者にしか描くことのできない、キュートであたたかい視点にあふれていて胸を打たれる(“It Chooses You” は『ザ・フューチャー』の製作過程を記録した作品としても読むことができる)。そこには、普段まったく意識せず、考えることもなかった市井の人びとのやけにリアルな生活と思想があり、インタビューイーとの独特の距離感はわれわれにとってのコミュニケーションの概念を揺さぶり、同時にフレッシュな感覚で読者をとらえる。そして彼らインタビューイーのポートレートを見ながら、ミランダの掲げる “trying to connect” (つながろうとすること)は、答えのない問いのようにわたしの中に残るのだ。

*1:たしかに、ケータイやコンピュータって精神的な一時避難の場所でもあるのだ。ミランダの書「ネットと自分の距離感」もまた、とても秀逸なテーマでおもしろかった。



After; 終了後のご感想

原題は(あなた以上にここに似合う人はいない?)だと思うけど、「いちばんここに似合う人」の「ここ」っていう言葉が気になっていました。ここってどこ？

初め読んだときには、アメリカのハイウェイでヒッチハイクしている光景がパッと浮かんだ。理由は全く分からない。ひとつひとつの話が進むごとに息が詰まっていく感じがした。だが、既視感のように不安と安堵が入り混じるような解放を感じた。生や愛などが歪でも散りばめられているからか、不思議な浮遊状態に立ち会えた気がする。

- ・性は隠したり恥ずかしいと思うのではなく大事に、もっと生活の中心に位置付けるべき
- ・不条理なことも沢山起きるけど、人生はもっと前向きに楽しもう
- ・なぜかという、ごまかして生きているけど私達の周りにはいつも死があり、いつ人生が終るかわからないから。

曇天の中でもかすかな光があるかもしれないと思って目をこらしてさがしつづける。

何故か日本神話(古事記)を思い出した。ミルクのような？泥のような？ものから最初の神が生まれた話。何か根源的で大事なものが作品の底流を流れている。舞台は現代のアメリカなのに、上手く口に出して言葉にできない。大切な事柄をユーモアを交えて、ウェットでない視点で描くけど、その根源的な大切さをあらためて思い出し共感を覚えるし、そのスタイルも私達が共感を覚えてしまうスタイル。

ミランダ・ジュライってどんなヒト？「こだわり」が少ない。まじめなのに、とぼけている。肩に力が入っていない。悲観してない、でも楽観してないニュートラル。よく見て観察してる。